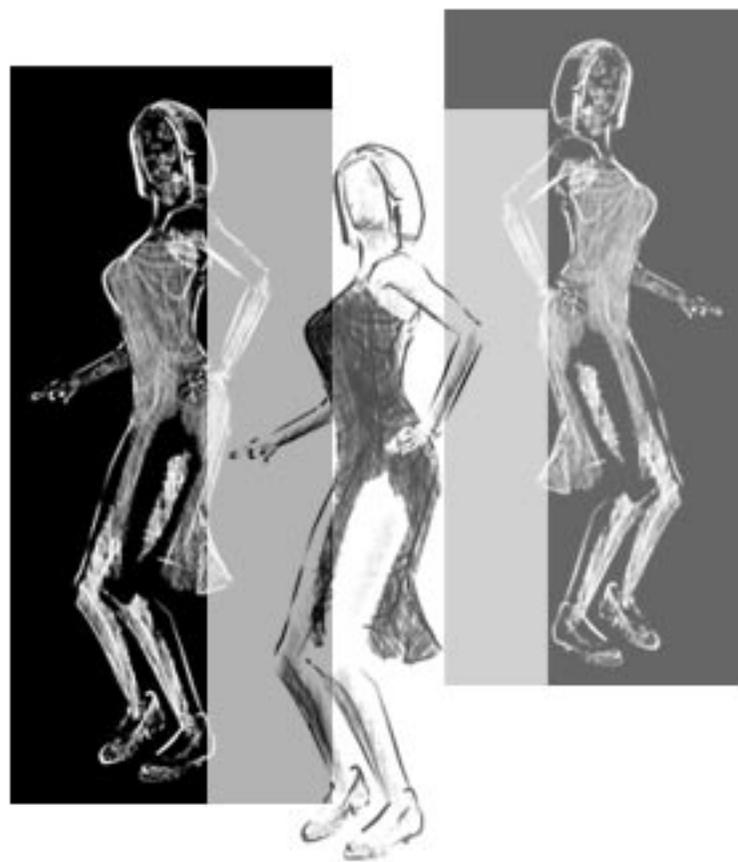


# 榊奈那子の 事件ファイル

doru



Anima Soralis

「奈那子、いい人いるのだけどつきあってみない？」あ  
るうららかな昼さがり昼食をぱくついていると親友の裕  
子がそうやってきた。裕子は私と同期入社だったが、先に  
結婚してもう三才になる子供がいる頑張るOLママさんで  
ある。「えー、わたしはまだいいよ」私は軽く手を振って  
笑った。

「あなたもう二十五でしょ。そんなこと言っているとお局  
さまになっちゃうぞ」裕子は手にひらひらと写真の台紙ら  
しきものを持って笑っている。こいつ確信犯だな。私は  
思った。

「親戚のおばさんが仲人マニアでさあ。私の会社にまだ片  
付いていない女の子がいるって言ったら渡されたの。だか  
らお願い、逢うだけ逢って見て」裕子は強引に私に写真を  
手渡す。

「うーん。どうしようかなあ」私はしぶしぶ写真を見る。  
あら、私好みのいい男、中の一枚を見ると、見合い写真に  
してはくだけた服装だけど感じのいいコーデイネイトで海  
を背景に笑っている姿があった。

「名前は渋谷五郎、特大商事の営業員だって」裕子は、ど  
うだ、おそれいったか！って感じで私を見る。「私が結婚  
していなかったらこの人に決めちゃうのだけどねえ」  
小さくわざとらしくため息をつく。

特大商事、二〇〇〇年までは東京のごく小さな商社に過

ぎなかつたが、二〇〇〇年を越えてから社長の代替わりによつて大きく発展した。今二〇二〇年の日本でベスト五にも入る大企業である。

「うーん」私はたこさんウイナーをかぶりつきながら考え込んだ。

「ねっ、いいでしょ？ 一度逢うだけでいいからさあ。逢つてくれたら今度ランチをおごっちゃう」裕子の必死の頑張りに私は折れた。

その日の午後七時、会社も終わりマンションで一人くつろいでいると携帯電話がなった。

「はい……はい。今回は……そうですね……わかりました」私は小さくため息をついて電話を切ると一緒に送られてきた一枚の写真を見た。目鼻立ちのいい色白の少年。いいところのぼつちゃんらしい。遊園地で回転木馬に乗つて笑つているものだった。ちよつと羨ましいと思つた。私には親に遊園地に連れていってもらつた記憶がない。

五分後、私はクローゼットから洋服を取り出す。どれを着ようか迷つたが、白いフリルのついたちよつと可愛い服を着て出かけることにした。

その夜街をさまよい歩いたが数人のチンピラが声を掛けてきた程度で何事もなく終わった。

翌日は土曜日である。大きな時計台の下で、薄桜色のスーツを着込んで私は待っていた。アナログの腕時計を見る。九時五十分。約束の時間まで後十分ある。今日は裕子との打ち合わせで、渋谷さんとの初デートの日である。私の写真も向こうに渡っているらしいからここで待っている私を見つけてくれるだろう。

「あとう、榊奈那子さんですか」爽やかなブルーのブレザーをきて渋谷さんはやってきた。見た感じは人あたりのよさそうな男である。私は少し気持ちが動いた。

第一印象を裏切らず渋谷さんは親しみやすい人で、私たちは笑いながら食事をし、はらはらどきどきの安っぽい娯楽映画を見て楽しみ、夜、ちよつと豪華な食事をした。

「奈那子さんはいい人ですねえ」渋谷さんは笑いながら言った。

「私あなたが思っているほどいい人じゃないです。私……けっこう嫌な女です」飲みかけていたコーヒーを置いて言った。

「そうですねか……誰でも人には他人の伺いしれない部分がありますからね」渋谷さんはちよつと暗い目をしていった。

渋谷さんが暗い目をした原因に心あたりがあった。昼映画館を出た後、金髪の柄の悪そうなにちゃんから声を掛けられたのだ。そのとき金髪のにいちゃんは二人とも顔見

知りのようだったが、渋谷さんはあきらかに嫌そうな顔を  
してとぼけた。今どきちよつと悪の友達がいてもおかしく  
ない時代、渋谷さんの反応には私は少し驚いた。

夜私が友達と約束があるといって、渋谷さんに謝って、  
夜十時になる前に私たちは別れた。そして私はマンション  
に帰り、昨日と正反対の格好で、——今日は、紫のパー  
ルの入ったチャイナ服に、真っ赤なルージュをひいて——で  
街に出た。

街は騒がしかった。車のクラクションの音、まだ年若い  
少年少女が大人たちに媚びを売り買われていく。大人たち  
は日ごろの憂さをはらうかのように酒を飲み、大声で歌を  
歌う。騒がしいのは音だけではない。街をぎらぎらと彩る  
ネオンや、警察のサーチライトの灯り、そして酒と埃と汚  
物の混じった匂いさえも騒がしかった。私は比較的安全な  
表通りを避け、わざと裏通りに入る。表の騒がしさが消え  
た代わりに危険な匂いがする。

まだ夜も浅いのに泥酔者が大声で私を呼びとめる。私は  
それを無視して歩いていく。

泥酔者は誰もかれも無視しやがってとどなりながらつっ  
かってくる。鬱陶しいので、左手の指一本を泥酔者の額に  
当て——誰かが見ていたら魔法のように見えたらう——  
昏倒させた。

三十分も歩いた頃、街のチンピラたちが髪をシヨキングピンクに染めた少女を車に押し込もうとしている光景にいきあたった。私はかなり遠いところにいたが、彼らの話していることを聞くことができた。これから人目のない場所に運ぶつもりらしい。ここに来る途中で何か薬を飲まされたりらしい少女は身体からは力が抜け、白目を剥き、口からは泡を吹いている。助かったとしてもしばらく思考能力に障害が残るだろう。でももともと知能指数はそう高そうに見えないし、後遺症が残ってもたいして変らないかもしれない。わたしはチンピラたちに近づいていって声をかけた。

「ねえ、聞きたいことがあるんだけど。あなたたち例の品物はどこに置いてるの？」

「はーん、ねえちゃん誰？ いきなり何言っているのだよお」くちやくちや合成ガムを噛みながらひとりごのんびりと答えた。とぼけているようだけど目つきが異様に鋭い。どうやら狙いは間違っていないかったようだ。

「その子どもかこの山のなかで絞めてから制作所にひきわたすのですよ？ でもこんどばかりはやりすぎたわ。明日から失業みたいね」

「なんのことだか……」と言いながらそいつはふりむきさま刃物を抜いて突進してきた。近頃海外から入ってくる合成ガムには人の反応速度を一瞬猛獣なみにするものがある

る。この男たちはまるでチーターだった。国際条約で嚴重に取り締まられているはずだがこの連中は物騒な品物をどこからか入手したようだ。

普通の人間ならとてもこの男の動きについていくことはできない。でも私にはそれもスローモーションのように見えた。チャイナドレスのスリットから太ももが出るのが少し気になったが、わたしは身をひるがえして相手の顎の骨を蹴り碎いた。それから手近な一人の腕を肩関節から引っこ抜き、つぎの男のすねを二本ともへし折り、残りのふたりの頭蓋骨をはち合わせて陥没させ、一人を残して全員叩き潰した。まわりの仲間が血へどを吐きながらのたうちまわる中で、一人つたつたまま呆然としているリーダー格の男にわたしはたずねた。

「さあ、言いなさいな。品物はどこにあるのよ？」私は男の手のひらを恋人がするようにもてあそびながら聞いた。ぽきん、生枝が折れるような音がしてぎゃあああという悲鳴があたりに響き渡った。指の骨が折れた音だった。指ぐらいで大袈裟ね。私はくすくす笑った。最後に両手の指が一本残らず砕けた時には男はぜんぶしゃべっていた。

ここは貨物船専用埠頭、夜の空気が微かに潮のかおりを含んで気持ちがいいはずだ。

いつもの私だったらそう思うだろう。だけでも戦闘モ-

ドになっている今の私は潮風でさえ、血の匂いに感じた。お目当ての倉庫にたどり着き、畏がないのを確認して、あらかじめ持ってきた用具で鍵をこじあける。暗がりでもわたしは見る事ができるけれど証拠写真の撮影のためにペンライトを点した。明かりのなかに大小の木箱が浮かび上がる。中を開けて私はその趣味の悪さに気分が悪くなった。梱包材といっしょに詰まっているのは美術品。それもただの美術品ではない。人体を加工して作られた美術品なのだ。たとえば何百個もの真珠で覆われた剥製の男根が数セット真つ赤な綺麗なケースにおさめられている。これはどこかの未亡人たちが自分を慰めるために造らせたのだろう…それからホルマリンに漬けた男根のはりせんぼん…女の剥製の足にいろとりどりの宝石をちりばめたもの、これは脚フェチの男が頼んだのだろう。そんなシユールな人体の美術品が、倉庫一杯に詰められている。私はお目当ての物を探すため、次々と箱を開けていった。そしてちよつと大きめの箱を開けたとき私は思わずほつと息をついた。中から出てきたのは、まだ幼さの見える武者人形。何かを言いたそうに小さく開けた薄紅色の唇、黒く深い物思いに沈んだ瞳だけでもそれにはもう何も映ることはない。やっぱり…：情報は正しかった。私は携帯で写真を取り、確認の電話をする。すぐに依頼者の手配したトラックが来るだろう。目の前にあるのは昨日送られてきた写真の男の子の

剥製だった。この子が行方不明になり、両親（大金持ちであった）がいろいろ探しまわった末に、思いあまって私の所属する組織に捜索を依頼したのだ。組織は、最近マフィアの資金源になっている生体美術品の一つになっている可能性を話したが、両親は他人に売られて慰め物になるくらいなら自分たちが秘密裡に引き取って男の子を偲んでいくつもりだと言い、そこで最終的にその極秘調査の仕事が私にまわってきたのだ。

その時背後で物音がした。私が武者人形に見入っている間に誰か倉庫に入ってきたのだ。私はふりむくとすばやく加速状態にはいつて侵入者に攻撃をかけようとした。だがつぎの瞬間息を飲み寸前で加速を解除した。そこにいたのは、あの渋谷五郎だったのだ。

彼も私の顔を見てひどく驚いたようだった。近くには例の金髪のチンピラと三人の物騒な物腰の男たちが拳銃をかまえていた。

「渋谷さん、残念だわ。あなたも関わっていたのね。もうすぐ特殊警察が来るわよ。あなたは自首したほうがいいわ」

依頼主は男の子の剥製をトラックで引き取った後、人間美術品の保管されている場所を特殊警察に匿名で通報する手はずになっていた。子供の武者人形が無事ならば、それ以外が解剖されようが、焼却処分にされようが関係ないら

しい。

「頼む、見のがしてくれ。捕まるのは嫌だ。ぼくは何も悪くない。ぼくはただ美術品を運ぶ便宜を図っただけだ」

そう言いながら彼は隠していた銃をわたしに向け引き金をひいた。

うーん、私は渋谷さんに幻滅した。デートしてぼうつとなつてちよつぴりいい男だと思つたのが間違いだつた。

私は瞬間的に加速状態になつて弾をよけた。あわてて物騒な男たちも撃つてきた。甘い新婚生活の夢を壊され頭に血がのぼつたわたしは遠慮なく怒りを爆発させた。数秒のち私の前には三人の物騒な男とお見合いの相手と彼のお目付け役だつた金髪のにいちゃんのぼろぼろになつた死体が転がっていた。

三十分後、剥製の男の子はトラックに運ばれ、無事親の元に帰つていった。剥製の男の子の武者人形は親が生きている間は大事に扱われるだろう。だけでも何十年か何百年か後かわからないが、あの剥製の男の子は人間美術品として闇の市場に出されるかもしれない。だがそれを笑つてはいられない。私だつて遺伝子を組みかえられた人間なのだ。私を作つた科学者たちは、私を最高の芸術作品と言っている。つまり私もまた剥製の男の子と同じく、人間を素材にした美術品と言えるわけだ。私は今少しの自由を得るために組織からの要求に永遠に応えていかななくては

けない。そう思うとあの男の子になんとか兄弟のような親  
近感をおぼえるのだった。